
BREAK

望月光輝

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B R E A K

【Nコード】

N 6 9 1 9 G

【作者名】

望月光輝

【あらすじ】

壊し屋、主に建物の破壊や人の手では壊せない大きなものを処理する職業そして人との繋がりがまで壊す、山吹屋という壊し屋の跡継ぎの山吹真人は彼の父が二年前に旅に出て以来山吹屋の社長代理として暮らしていたしかし山吹屋は現在経営難そんな折に父からの手紙が届き彼は壊し屋の裏の部分に関わっていくことになる

プロローグ：父からの手紙

壊し屋

建物の破壊や人の手によって壊せない大きな物を壊す職業（？）
そして、

人との繋がりさえ壊す仕事

【とある町のとあるビルの一階】

ここは壊し屋 やまぶきや 山吹屋の事務所

「あー、暇だ」

社長が座るはずのデスクに腰をかける明らかに社長にしては『若すぎる』少年

彼は山吹 真人 まひと 壊し屋 山吹屋の跡取りで高校一年生

「若あ、そんなこと言っても依頼が来ないんだから仕方がないですよ」

そんな彼に声をかけるのは真人よりもずっと小さな少年 藍沢蓮 あいざわれん

まだ小学生の蓮だが、一応これでも立派な山吹屋の社員兼居候だ

蓮の言うとおり山吹屋にめったに依頼は来ない

今山吹屋は最大のピンチというか経営難であつた

蓮「そんなことより若、社長から手紙が来てましたよ」

そう言いながら真人に社長からの、つまりは真人の実の父親からの手紙見ながら言った

真「あの糞親父、今度は何処に居やがるんだあ」

窓の外を見つめながら尋ねる真人

蓮「えっと、今度は・・・フィリピンですね」

手紙を見つめながら答える

そう山吹屋の社長は現在フィリピンにいた

何故社長がいなくて息子である真人が働いているかと言つとそれは二年前に遡る

二年前・・・

それは蓮と真人の父と真人の三人で暮らしているときのことだった何時も通りに蓮が夕飯の準備をし真人がテレビを見ているとき

父「真人！蓮！父さんこれから旅に出る！」

真「ああ、そう」

父の重大発言にとくに気にした様子も無く

テレビのリモコンを弄る息子

蓮「ええええー！しゃ、社長！会社は如何するんですか！」

一番慌てたのは小学生の蓮

父「真人とお前に任せる！」

何故か偉そうに言う父

蓮「何で威張つて言うんですか！」

父「まあ、そういうことだから頑張れよ！」

真「お、打った」

父の発言よりこのときの真人は野球のほうが大事だった

蓮「しゅ、出発は何時何ですか！」

慌てて問い詰めるが

父「うーん、今から」

真& a m p ; 蓮「はっ？」

さすがに「今から」ということは予想していなかったのか真人も反応してしまふ

父「行つて来まーす」

しかしもう父の姿は見えなくなっていた

蓮「しゃ、社長ううー！」

その場には半泣きになって叫ぶ蓮と

真「お、オレまだ学生なんですけどおおおー！」

けどー↑エコー

けどー↑エコー2

真人の叫び声が響き渡った

〈回想終了〉

真「まさかチャランポランとは言え本当に出てくなんてなあ」

何処か懐かしそうにしみじみと言う真人

蓮「本当ですねー」

空を見つめながら相槌を打つ蓮

若干目に生気が無い

真「手紙なんだって」

蓮「えっと、ちょっと待ってくださいね」

真人と蓮へ

元気にしてるか？父さんは元気だ

父さんは今フィリピンにいる

現地の人たちもいい人ばかりだ

珍しい置物を見つけたから折角だから送っておく

お前たちのことだからそろそろ山吹屋はやバイことになってると思うが

まあ何とかして頑張ってくれ

もしも潰したら・・・

父より

真「分かってんだったら、帰って来いやああー！！！！！！」

蓮「は、ハハハ・・・」

ぶち切れる真人と苦笑いの蓮

真「つーか何とかってなんだよ！もうちょっと助言とかあるだろ！いちいち呪われそんな置物送ってくんじゃねーよ！！」

蓮「わ、若、落ち着いて、続きがありますから」
真「続きい？」

P・S

もしも困ったことがあったら

ココに行け

手紙使うとP・Sとか追伸とか使いたくなるよな（笑）

と言う続きと小さな地図が一枚入っていた

真「それもう本文に書いとけやあー！（笑）じゃねーよ！」

ついに怒りがピークに差し掛かる真人

蓮「ん？この地図・・・」

地図を見つめながら首を傾げる

真「あ？」

蓮「いや、この地図に書いてあるの社長がよく行っていた居酒屋さ
んなんですよ」

真「居酒屋あ？」

そう言いつつ蓮から地図を取って見つめる真人

真「じゃあねえ、行ってみっか」

蓮「はい！」

この時に親父からのこの手紙が無ければ俺らは知らなくてすんだの
かも知らない
壊し屋の裏の顔を

一 壞目：居酒屋鶴亀

「真人」

滅茶苦茶小さいときに親父と二人で出かけた近所の川原

この時は確か親父の仕事が珍しく休みで二人でキャッチボールした後だったな

真「お父さん？」

父「でつかくつて強え男になれよ」

真「うん！僕強くなるよ！」

父「でもな力が強いだけじゃ駄目だ」

真「？」

珍しくあの馬鹿親父が真面目な顔して

父「力があつても誰も守れねえんじゃそれはただの暴力だ、でも誰かを守るために逃げんのは臆病モンだ、力の強さと心の強さそれから・・・」

真（親父、なんて言ってるんだよ、聞こえねえよ）

「か、すよ」

かすかに聞こえてくる声

真「聞こえねえよお、親父い」

布団の上で寝言を言っている真人と

「若！朝ですよ！」

必死に彼を起こそうとする蓮

いつも通りの山吹家の朝だ

真「ゆ、め？」

まだ少し寝ぼけ眼で起き上がってくる真人

頭には少し寝癖が付いている

蓮「若！早くしないと遅刻ですよ！」

いまだに慌てて彼を急かす蓮

真「わかったつての、つーか、何でお前が起こしに来てんの？」
ぼーっしながら蓮を見つめる

蓮「若が何時まで経っても起きてこないからですよ」

頭を抑えながら答える

真「俺の目覚ましは？」

蓮はその問いに無言で目覚まし時計の置いてあつた場所を指差す
彼の指した方向に視線を持って行くとそこには

真「えっ？これめ、目覚まし？」

昨晚まで時計だった物を指差しながら問う真人

蓮「はい」

目覚ましは見事に木っ端微塵になつていた

真「た、高かったのにいいー！ー！」

山吹家の朝彼らの遅刻は確定した

真「もういい、今日学校サボる」

蓮に作つて貰つた味噌汁を啜りながら不貞腐れたように言う馬鹿

蓮「えええ！だ、駄目ですよ！」

と真人を叱る蓮だが

小学生がフリフリエプロンで高校生叱つてもなあ

真「やだあ、僕もう学校行きたくないい（棒読み）つーか馬鹿と書いて真人と読むな」

とゆうか小学生に叱られる高校生つて一体

つーかうるせえバーカバーカ！

馬鹿を馬鹿と読んで何が悪い！

蓮「可愛く言つても駄目！それから天からの声と揉めんな！」

真「たまには俺にも休日くれよあ、天からの声後で覚えてるよ」

蓮「だから」

とそこまで言ってから考え込む蓮

そして休ませてもらえるのかと少し期待する真人

蓮「いいでしょう」

真「本当に！」

子供ガキのように喜ぶ真人

だが

蓮「ただし、条件があります」

その言葉にピタリと動きを止める

真「何だよ、条件って」

蓮「お仕事です」

真「離せよ！俺は絶対仕事なんてしねえからな！」

蓮「はいはいはい」

今の状況

仕事なんて嫌だと真人が騒ぐ↓蓮手刀で真人を沈める↓縄で真人グルグル巻きに

そして現在蓮に引き摺られながら例の居酒屋に移動

先日「仕事なんてやってらっれつか」と真人が動く気ゼロだったので居酒屋に行くのを断念したが

蓮「まさか平日にお仕事出来るようにしてくれるなんて、まさに怪我の功名ですね」

居酒屋

つるかめ
鶴亀

蓮「こんにちはー」

さすがにずっと引き摺る訳にもいかないので縄を解き連れてこられた真人

真（まだ、体の節々が痛え）

さすがに今は真昼間なので居酒屋には明かりが点いておらずドモンとした雰囲気だ

蓮「あれー、留守かなあ？」

真「じゃあ帰ろうぜ」

さすがに留守では仕方が無いなと思った時

「今、営業時間外ですよ」

一壊目：居酒屋鶴亀（後書き）

皆さん、どうも始めまして昨日ゲームセンターでUFOキャッチャーの神的な物が降りてきた気がした望月 光輝です。

私にしては珍しくバトルものを書き始めましたがコメディばかり書いてきたものですからそっちの方へ走って行くことが度々あると思いますがどうかながーーい目で見てやってください

私の他の作品をご覧になった方はご存知かも知れませんが

関西弁が好きだぁー！な私です
が

このブレイクに出すかどうか迷っております

もしブレイクに出す場合は私の他の作品に出ている黒井 遊星くん

（唯我独尊！？生徒会！！や関西男＋冷徹女〓漫才！！などに出演中）とは別物にしたいとおもいます

まあ、こんな私ですがこれからもブレイク共々宜しくお願い致します

マジで関西弁どうしよう

ANOTHER：裏側（前書き）

このお話は前回のお話と繋がっておりませんので飛ばして貰っても結構です。

ANOTHER：裏側

オレは障害を排除するまで、
けど

「ゆ と、 い とけ」

（うつせえな

今忙しいんだよ

コイツ氣にくわねえからグチャグチャにすんだよ）

「おい！幸人^{ゆきひと}！もうそんなくらいにしとけ！」

未だに人だった物を殴り続ける少年、幸人と

彼の肩を掴んで止めさせようとする彼よりも何倍も大きい青年、響^{ひびき}

響「おい！聞いてんのか！」

響の声にやつと殴ることを止め立ち上がり人だったものに目を向ける幸人

幸（また、ヤツちまった、血氣持ちわりイ）

血の匂いに顔を顰める幸人を見つめながらため息をつく響

響「今日はまた一段と酷えな、もう原型留めてねえじゃねえか」

チラリと今まで殴られていた物を見つめ「氣持ちわる」と小声で呟く

響「スイッチ入ったのか」

幸「何か氣付いたら殴ってた」

さつきまで態度とは打って変わりポケーっとした態度で答える

響「お前、毎回訳分かんねえとこでスイッチ入んのな」

ピリリ

携帯の音になる

響「そういえば！お前携帯は！」

急に幸人に詰め寄る

幸「あつ」

「忘れてた」と答える幸人のマイペースさに頂垂れる響

響「あつ、じゃねえだろ、あつ、じゃ」

ピリリリ

幸「それ、出なくて良いの？」

響の手の中にある携帯を指差しながら言う

響「分かってるよ！」

「ったく、誰だよ」とブツブツ言いながら携帯を開け相手を確認すると

響「チツ」

幸「ワオ、盛大な舌打ち」

響「いいから、携帯探して来い」

幸「はいはい」

舌打ちしつつも一応でる

響「こちら第一班です」

「ご苦労だった、次の仕事だ」

響「はいはい、次は何すか？」

めんどくさそーに質問する

「何正義の味方が動きだしたらしい」

楽しそうな声で答える電話の相手

響「なるほど・・・」

「幸人と挨拶に行つてやれ」

響「挨拶は大事ですもんね」

「フフフ、よく分かっているじゃないか、あまり失礼の無いようにしろよ」

響「りようかい」

電話を切る響

幸「たいちよー、発見してきました」

響が電話をしている間に残骸になった携帯を発見してきた幸人

響「てんめえ！まーたぶつ壊しやがって！」

幸「壊すのが本業だから、それよりもあの人何だって？」

残骸になった携帯を弄りつつ尋ねる

響「HERO様のご登場だとさ、あー、こりゃーもう直んねえな」

幸人の手から携帯を奪い取って答える

響の答えに口元を歪ませる幸人

幸「HEROが出てくるってことは悪の組織も出ないかね」

響「そうそう、正義の味方には悪の怪人をつてこと」

幸人と同じく楽しそうに答える響

響「社長からのご命令で挨拶に行つて来いってさ」

懐から写真の付いた書類を出して幸人に渡す

幸「そうだね、早く会いたいね」

写真を見つめ写っている彼の名前を楽しそうに呟く

写真に写っていたのは

幸「山吹 真人くん♪」

ANOTHER：裏側（後書き）

やっちゃったとか思ってる望月です。今回のお話アナザーは望月の正義の味方ばかりスポーツトライトが当たって詰まらないなあという望月の浅ーい考えから来ております。当初の考えは幸人ことユーちゃんを裏の

真人ことマー君にして響兄ちゃんことヒー君を裏蓮くんにして本編だそうと考えていたのですが、もう番外編みたいな感じの物でよくねと思ったのでアナザーに来て貰いました（本編にも出るけど）、私的には保護者権お兄ちゃんのヒー君がお気に入りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6919g/>

BREAK

2010年10月20日19時03分発行